☆世界の子どもたち☆

保育者からリタラシーワーカーへ

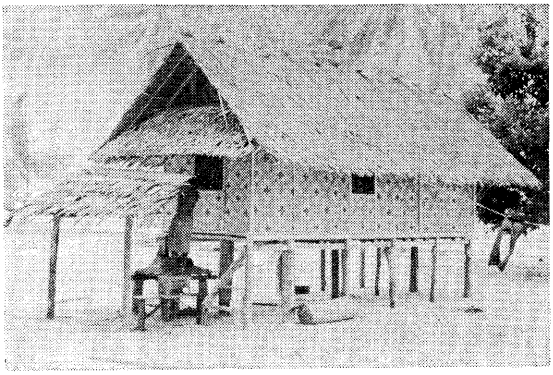
永井康子

S・I・L

世界中にいまなお散在する文字を持たない人々の言葉を文字化し、彼らの民話等を書きとどめ、また聖書の翻訳に努めている、ウィクリフ聖書翻訳協会（Wycliffe Bible Translaters）という組織があります。少数部族の言葉を保存しなくても、英語（又は他の共通語）で良いではないかという意見もあります。しかし、母国語はとても大切なものです。

私はオーストラリアに来てから六年、今では英語に不自由しませんが、三浦綾子さんの『塩狩峠』を英語で読んだ時には、何となくまわりくどいと思いました。日本人の私には、やはり日本語の方がすんなりと受け取れました。これは、どの人にとっても同じではないでしょうか。彼らの風俗習慣は、彼らの言葉でこそはっきりと言い表わし、理解できるのです。

ウィクリフ聖書翻訳協会のメンバーになり読み書き（リタラシー・ワーカー）を教える先生として働くためには、その姉妹機関でもあるＳＩＬ（Summer Institute of Linguistics）で、未知の言葉を分析するための技術――音声学・文法等と、その言葉の読み書きを教えるための技術・教科書の作成方法等について、綿密に学んでおく必要があります。それから、最も大切なこと、人々をよく理解することを



◀ ワンゴール村の住居

学びます。そのために、原地実習 field training（通称ジャングル・キャンプ）が、パプア・ニューギニアで行なわれます。私はこのジャングル・キャンプに、一九七八年三月から七月まで参加しました。

パプア・ニューギニアにはピジョン英語（英語・スペイン語等を混ぜ合わせて作られた独特の言葉）という共通語がありますが、一九七五年に独立した時に、英語を国語と制定しました。けれどもこの国には現在約七百もの言語が存在し、すでに約二百の言葉が文字になり、聖書が翻訳されています。

パプア・ニューギニアの北岸の都市マダーンから約20kmの山の上、ノボノブというところに、ジャングル・キャンプの本部があります。将来のへき地生活に備え、食料保存、看護衛生、水泳、山岳訓練の実習をし、それからさらに二か月、現地の村で初めての外国人として生活することになるのです。フィンランド出身のピルッコ・ルオマさんと私は、ワンゴールという村に派遣されました。

ワンゴール村での生活

ワンゴール村というところ

マダーン市から海岸沿いに約160km北へ行ったところに、ワンゴール村があります。ここには電気も電話もありません。薪とランプの暮らしです。人口約八十人の小さなこの村の北東には真青な南太平洋が広がり、すぐ目の前にも活火山マナム島が浮かんでいます。南西は一面、緑の椰子（ココナツ）の林です。二週間毎に、村全体が協力してこの椰子園で働きます。私たちのような時間的観念がなく、皆のんびりと暮らしています。

彼らの家は、暑さを避けるために床は地面から1～2m高くなっており、窓もあっ

て風通しよく造られています。お勝手のある家もありますが、多くの家族は砂の上に空缶を三つ並べてなべをのせ、下に火をおこして雑煮をつくります。屋根は草ぶきですが、壁は、竹に似た木を長く裂いて編んであります。いろいろな編み方があり、各家の壁の模様が違うので、とても美しいと思いました。

交通機関

ワンゴール村から一番近いボギアの町までは、車で四十分位かかります。徒歩か、PMV (Public Motor Vehicle) と呼ばれるトラックの荷台に乗って行くかのどちらかです。荷台はほこりっぽく、ガタガタ道を行くのでとても揺れます。誰もが皆私たちに対してとても親切で、よく助手席に乗せてくれました。PMVは決められた時間に走るわけではないので、利用しようとする時には何時間も道端に座って待つ覚悟が必要でしたが、私たちが手を振ると、どんな車でも必ず止まってくれました。これは現地の人々には通用せず、ピルッコさんと私だけの特権でした。

村での生活

村での私たちの仕事は、ワンゴールと他の四村間の方言及び生活状態の違いを調査することと、現地の人々と良い関係を結ぶことでした。村の人々と私たちの共通語＝ピジョン英語を使いながら、ワンゴール村の言葉マヤ語を少しづつ習いました。また、村の近くには小学校がありませんでしたので、七～九歳位の女の子五、六人に、読み書きを少し教えました。

村の人々は、村で一番新しい家＝村はずれにあるハウス・ボーイという家を貸してくれました。床は隙間だらけなので、掃く時とても便利です。ほうきは、ココナツの葉からつくります。またこの家の床下の砂地はたいへん涼しいので、水をはったバケツは、冷蔵庫の代りになります。といっても残り物用で、肉や野菜は乾燥させて保存しました。

何しろ私たちのすることは何でも珍らしいものですから、いつも誰かが見に来ています。雑煮しか知らない彼らが土のかまどをつくる手伝いをしてくれた時の顔……そのかまどでパンを焼くたびに、村中の人たちが集まってきます。そして毎日交代で、さといもの雑煮を届けてくれるのです。料理したものをくれるというのは、〝親しい間柄〟の印なのです。それで私たちは、焼きたてのパンやケーキをあげました。ワン・トーク・システム(いわゆる物々交換)の暮しをしたのです。

村で使う水は、山からパイプで引かれています。パイプが一本通っていて、絶えず水がザアザア出ています。ここでシャワーも浴びられるので近くて便利でしたが、一

か月もの間パイプのどこかが詰まってしまった時には、水を求めて上流にまで行かねばなりませんでした。

ワンゴールの人々の髪の毛は黒くてちぢれているので私の長く真直ぐな髪はとても珍しく、私が髪を洗うごとに見に来ました。子供たちは、とかした時にぬけた私の髪の毛を大切にしまっておくことにしました！

男女の役割

パプア・ニューギニアの女性の役割は、西欧諸国よりも日本に似ていると思います。オーストラリアでは男性が荷物を持ってくれます。ところがこが国では、重い荷物を背負って行くのは女性の仕事です。女の子供たちは、小さい頃からビールムという網の袋を頭から背にかける訓練をされるので、首の筋肉が強くなるのです。

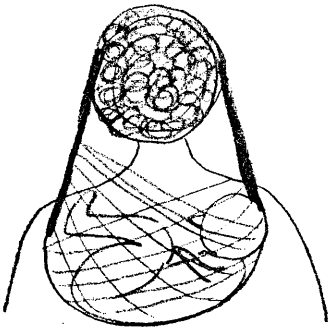
畑を耕すのは男性の仕事ですが、その後、さつまいもやさといもを植え、収穫するのは女性の仕事です。浜辺で薪を拾うのも、薪を割るのも女性の役目。料理も女性の仕事ですが、男性も料理に興味を持っているということを発見しました。

男の子は、十三～十四歳になるとカヌーの漕ぎ方を習います。槍を持ってダイビングをし、海の幸を持って帰るのが仕事です。また、山へ猪狩りに行くこともあります。

村の子供たち

子供たちは、三歳頃まで母乳で育ちます。母親はビールム（網の袋）に小さな子供を入れて運びます。日本のおんぶと似ていますが、ビールムの中で子供は母親の背に対して横向きになる点が違います。

子供たちは小さな妹や弟の面倒を見たり、母親の手伝いを一生懸命にします。追いかけっこ以外のゲームをして遊ぶ場面は一度も見かけませんでしたが、浜辺で砂を掘ってカニやグムングと呼ばれるカニによく似た軟体動物をつかまえては、食べていることがありました。ピルッコさんと私も、よく仲間に入れてもらいました。彼らにはあそびのための畑があり、母親の真似をして働くこともできます。また、浜辺に掘立て小屋を建て、小さな魚やカニを採り、火をおこして実際の生活を子供たちだけで楽しんでいるのです。何と素晴らしい経験でしょう!!



▲ ビールム

◀ 村の子供たちと

両親と子供は普通、一軒の家で生活しています。ところで、どの村にもたいてい、ハウス・ボーイという家があります。十代の男の子供たちが共に寝泊まりするための家です。彼らの両親は同じ村に住んでいることも、近くの村に居る場合もあります。ハウス・ボーイに集まった男の子たちは共に漁に行き、とれた海の幸は家族や親戚に分けてあげています。大漁の時には、私たちにも大きな伊勢エビ等をくれました。

戦争の跡

近くの椰子の木には、鉄砲の穴がたくさん空いていますし、村人たちは、日本兵のことをよく覚えています。その兵隊さんの国の女の子がいったい何をしに来たのだろうと、さぞ不思議に思ったことでしょう。

ある日私たちは、男の子たちの案内で、日本兵が印をつけたという木を見に行きました。村はずれの大きな川のそばに、その木がありました。木の皮を剝いで、二列に「太田、本橋」と彫ってありました。この二人の兵隊さんは、ずっと以前に亡くなったということです。戦争で日本が残した傷は、いったいどのようなものだったのでしょう……

現地の人々の中に入って共に生活し、言葉を学んで実際に使っていくことは、彼らを理解するために大切なことです。二か月一緒に暮した私たちがワンゴール村に別れを告げる時には、村人全員が集まって、涙を流して見送ってくれました。素晴しい経験でした。

さて、私は、SILの全ての課程を終了し、この九月から、ウィクリフ聖書翻訳協会のメンバーとして、オーストラリアのダーウィンにある原住民(アボリジニー)支部に来ました。ワンゴール村での生活から得たことを生かして、原住民(アボリジニー)の中に入って、読み書(リタラシー・ワーカー)きを教える先生の仕事を始めるわけです。